

5章 総合問題5

問題

【1】

解答例

「(self-handicapping とは) 失敗を恐れるあまり、失敗した際の言い訳として、成功を難しくする条件をあらかじめ自らに設定しておくことである。このようなやり方は本来的に備わっている自己の能力の発揮を妨げ、結果的に失敗を招くことになる。」(100字)

解説

【構成】

論旨の展開は以下の通りである。

第1段落：不運は、常に起こり得る最悪の瞬間に襲ってくるように思われる。〔導入部分〕

第2段落：self-handicapping の定義〔主題〕

第3段落：self-handicapper の事例〔主題の例証〕

第4段落：self-handicapping は、最終的には失敗を招く〔結論〕

【指針】

論旨の展開に沿って第2段落と第4段落をまとめる。

全訳

不運は常に起こり得る最悪の瞬間に襲ってくるように思われる。夢にまで見た仕事の採用面接に出かけようとしている男は、交通渋滞に巻き込まれて身動きできなくなる。最終試験を受けようとしている法学部の学生は、目もくらむような頭痛で目が覚める。陸上選手は、大試合の直前に足首を捻挫する。残酷な運命の完璧な事例である。

果たしてそうであろうか。このような不運な出来事を研究している心理学者たちは、今や多くの事例において、それらは周到に用意された潜在意識の策動ではないかと考えている。人はよく自ら不利な条件を背負うこととして知られる自滅的な行為の一形態——あるいは簡単に言えば失敗した際の口実作り——にかかわる。その手順は簡単である。重荷となるような不利な条件を背負うことによって、努力が報われない可能性を高めるのである。それは愚かなことのように思われるが、実際には巧妙な頭脳プレー、すなわち失敗した際に面子を保つことができる困難な状況をあらかじめ設定しておくという1つの策略なのである。

自ら不利な条件を背負った典型的な人物は、18世紀に生きたフランス人のチェス王者ドシャペルである。ドシャペルは瞬間にその地域の王者となった著名なチェスの選手である。しかし競争が過酷になると、彼はすべての対局にある新しい条件を取り入れた。すなわち、対局者が有利な条件を受け入れ、それにより自分が敗れる可能性が高まる場合のみ、対局しようとしたのである。たとえ彼が実際に敗れたとしても、彼はそれを対局者の有利な条件のせいにすることができ、誰も彼の実力の真の限界を知ることはなからう。一方、もし彼がそのような低い勝算に抗って勝ったとしたら、彼はその驚くべき才能に対して、より一層の尊敬を勝ち得るであろう。

驚くべきことではないが、口実作りの常習者となる可能性の最も高い者は、成功を求める気持ちの強すぎる者である。そのような者たちは何においても失敗者のレッテルを貼られることを恐れるあまりに、常に何らかの不利な条件を失敗を言い逃れるために持つようになる。確かに、自ら不利な条件を背負うことは時に成功に対する不安に対処する有効な方法の1つとなり得るが、研究者たちが言うように、それは最終的には人を失敗させる。長い目で見れば、口実作りを行う者たちは彼らの真の潜在的可能性を發揮し尽くすことができず、彼らが大変気にかけている地位を失う。そしてそんなことはないと言う彼らの抗弁にもかかわらず、責めを負うべきは彼ら自身でしかないのである。

注

- ℓ. 1 ◇ strike = attack (suddenly)
 ◇ about to ... = just going to ...
 ○ a man を修飾。
- ℓ. 2 ◇ get stuck 「くっつけられた状態になる」
 < stick = cause (something) to be fixed cf. sticker (シール)
 ◇ in traffic 「交通の中で；往來の中で」
- ℓ. 3 ◇ twist = turn (something) round cf. twister = tornado; whirlwind
- ℓ. 4 ◇ cruel = causing pain or suffering (deliberately)
 ◇ fate = destiny
- ℓ. 5 ◇ Or are they (perfect examples of cruel fate)?
 ◇ incident = event; occurrence
- ℓ. 6 ◇ carefully arranged schemes 「配慮に満ちて整理された計画；注意深く手配された陰謀」
 ○ scheme = systematic plan; deceitful plot cf. schema = outline
- ℓ. 7 ◇ engage in = take part in
- ℓ. 8 ◇ term = a word or phrase
 ◇ process = a course of action or a procedure, especially a series of stages in manufacture or some other operation < proceed = go forward
 ◇ take on = accept
- ℓ. 9 ◇ it = that ~
 ◇ fail at = fail in; be unsuccessful in
 ◇ endeavour = effort; hard work
- ℓ. 10 ◇ one = a clever trick of the mind
 ◇ set up = build; prepare; organize
- ℓ. 11 ◇ save face = preserve esteem; avoid humiliation 「面子を保つ」
 ⇔ lose face = be humiliated 「面子を失う」
- ℓ. 12 ◇ classic = very typical
- ℓ. 13 ◇ distinguished = eminent; famous < distinguish A from B = tell A from B
- ℓ. 14 ◇ adopt = accept
 ◇ condition = a situation that must exist before something else is possible or permitted
 cf. unconditional surrender (無条件降伏)

- ℓ. 15 ◇ would compete : 直説法
 ◇ only if … 「…の場合はじめて」
 ◇ opponent = a person who opposes
- ℓ. 16 ◇ blame A on B = blame B for A
- ℓ. 18 ◇ odds = chance; probability
 ◇ all the more = much more 「一層その分だけより多く」
 ○ all : 強意語
 ○ the = by so much (その分だけ)
- ℓ. 19 ◇ most likely to become …
 ○ the people を修飾。
 ○ those too eager for success も同様。
 ○ those = the people
- ℓ. 20 ◇ be labeled something = be described as something
 ◇ a failure = a person who fails
- ℓ. 21 ◇ explain away = account for (something) in order to avoid blame
 ◇ true = truly
- ℓ. 22 ◇ cope with = deal successfully with (something difficult); manage
 ◇ anxiety = a strong desire; eagerness
 ◇ now and then = from time to time; occasionally
- ℓ. 23 ◇ over the long run = in the long run
 ◇ fail to … 「…しない; …できない」
- ℓ. 24 ◇ live up to = fulfill
 ◇ potential = latent qualities or abilities that may be developed and lead to future success or usefulness
 ◇ care about = care for; like; be interested in
 ◇ despite = in spite of; without being affected by
- ℓ. 25 ◇ to the contrary = to the opposite effect; with the opposite meaning or implication
 ○ their protests を修飾。

【2】

解答

- (1) disappointment (2) knowledge (3) satisfactory [satisfying]
 (4) reference (5) decision

解説

2文のうちの片方に空所があり、その空所を埋めて2文の意味をほぼ同じにする問題。この手の問題を解くには、完成されている文の意味を正確につかみ、片方の文に欠けている情報は何かを考え、それを文法的に正しい形で空所に補充すればよい。

- (1) a 「その政治家は選挙に敗れたので、非常に失望した。」
 b が To his great () で始まっているので、「ひどく失望したことには」に

対応する表現 To his great disappointment を思い出す。To his great disappointment とほぼ同意の表現に、Much to his disappointment がある。

- (2) a 「確実というわけではないが、私が知る限りでは、彼の言う話は本当だ。」
as far as I know 「私が知る限り」を句で表せば、to the best of my knowledge となる。
同意表現に to my knowledge / as far as my knowledge goes などがある。
- (3) a 「彼が試しに使ったすべてのペンの中で、彼が満足したのは1本だけだった。」
be satisfied with ~ 「~に満足している」から考える。only one was ()
の one は a pen のことだから、「物が(人にとって)満足な」を表せる語は何か、と
考えて satisfactory [satisfying] を思い出せばよい。
- (4) a 「彼は自分の個人的な問題には言及しなかった。」
refer to ~ = make reference to ~ 「~に言及する」という表現を知っているかを問
う問題。
- (5) a 「我々はその件に関してはまだ決定していない。」
decide on ~ = make [take] a decision on ~ 「~について決定する」という表現を
知っているかを問う問題。

[3]

解答

「全訳」下線部参照。

全訳

科学者は即座に活用され得る発見の追究に専念すべきである、と要求する者も今日では多く存在する。しかしながら、私が思うに、未来を完全に不毛なものにするこれ以上に確実な方法はあり得ないであろう。というのも、ほとんどすべての偉大な科学技術上の進歩が、あらかじめ計画が立てられないほどに、予測の困難な発見に依存しているからである。自然は自分の都合に合わせて、自らの秘密を忍耐強い探究者に明かす。そして明白な事実、自然は人間よりもはるかに賢明であるということである。それゆえに、純粋科学は高尚なお遊びとして片付けることができない。

注

- ℓ. 1 ◇ demand = ask authoritatively or brusquely (無愛想に)
◇ men of science = scientists
◇ devote A to B = give A over to B 「A を B に捧げる」
- ℓ. 2 ◇ pursuit = the action of pursuing something < pursue = follow or chase; seek to attain or accomplish (a goal) over a long period
◇ that : 先行詞は discoveries
◇ turn (something) to account = use (something) well and profitably; turn (something) to one's advantage 「(経験など)を上手く利用する;生かす」
○ account = a record of all the money that a person or business has received or paid out 「利益」
◇ to my mind = in my opinion

- ℓ. 3 ◇ could : 仮定法／婉曲
 ◇ render = cause (something) to be; make
 ◇ barren = unable to produce fruit or vegetation
- ℓ. 4 ◇ advance = make progress
 ◇ depend upon = be controlled or determined by
 ◇ discoveries [so unexpected as to be unplannable]
 ◇ so ~ as to ... 「… するほど～」
- ℓ. 5 ◇ in her own time 「人間の都合に構うことなく」
 ○ in *one's* own time = at a time decided by *oneself*
 ◇ reveal = show; display
- ℓ. 6 ◇ infinitely < infinite = limitless or endless in space, extent, or size; impossible to measure or to calculate
 ◇ pure science 「純粋科学」 *cf.* applied science (応用科学)
- ℓ. 7 ◇ dismiss = send away; put away
 ◇ polite = scholarly; refined; elegant
 ◇ amusement 「娯楽」 *cf.* leisure (余暇)

【4】

解答

- (1) オ (2) ウ (3) 「全訳」の下線部(3)参照。 (4) オ (5) エ
 (6) (6a) オ (6b) イ (6c) ア (7) ア
 (8) 愛着のある場所や環境から離れるという課題を与えること。
 (9) 2番目：ウ 6番目：キ

解説

- (1) 選択肢の意味は以下の通り。
 ア 目的がなく、自滅的。
 イ 健康志向で勤勉な。
 ウ 自制心があり、悪いことをしない。
 エ 現実から逃避し、過去にあこがれて。
 オ 努力を要しない楽しみと気楽な生活にふけて。

下線部(1)の variation は「変種」という意味なので、下線部(1)は「誰もが『私は頑張ることさえしていなかった』という言い回しの変種を提供してくれているように思える」という意味。つまり、「頑張っていない」という言い回しから一般に想像される姿とは「少し異なった姿」をフランス人は見せてくれる、という意味になる。その「少し異なった姿」とは、端的にいえば、下線部の直前の文中の loving their lives (人生を大いに楽しんでいる)ということになるが、その具体的な内容は第2～3段落で述べられている。つまり、白のロングドレスで、ヘルメットをかぶらずに自転車に乗っていたり、短パン姿でローラースケートをはいて通り過ぎていく女性たちや、おしゃれな姿でちょっとおしゃべりをしていたかと思うと、ボルシェをゆっくりと運

転している男性たちの姿である。あるいは、ファッション写真の中にいるかのような様子で、タバコを吸いながらカフェでずらっと並んで隣り合わせで座っているカップルたちである。ここから読み取れるのは、あくせくしないで気ままに生活を楽しんでいるフランス人の姿で、これに最も近い選択肢はオである。

(2) 選択肢の意味は以下の通り。

- ア 彼女の部屋はいつもよく整頓されている。
- イ 警察は公共の秩序を回復できなかった。
- ウ 単語はアルファベット順に載っている。
- エ 彼は生徒たちに一列に並ぶようにと厳しく命令した。
- オ すぐにこの本を 50 部注文しよう。

下線部(2)を含む英文は、まず、They know what awaits them (彼らは何が自分たちを待ち受けているかを知っているのである)と述べられ、ダッシュの後で、待ち受けているものの具体例として、horrible deaths, wild parties (恐ろしい死、熱狂的なパーティー)が挙げられている。それに続いて下線部(2)で in no particular order と述べられるのである。order にはさまざまな意味があるが、ここでは、「順番」という意味で考えてみると、「恐ろしい死」という日常とはかけ離れた恐怖に満ちあふれたものと、「熱狂的なパーティー」という身近で楽しいものという対極にあるものを挙げて、それらが、彼らの人生においてどのような関わり方をするのかはわからないが (= どのような順番で自分の人生に訪れるかはわからないが)、それらが自分たちの人生に待ち受けていることはわかっている、といった意味になると考えられ、文意が通る。よって、選択肢の中で order を「順番」という意味で用いているウが正解。他の選択肢の order の意味は、ア「整頓」、イ「秩序」、エ「命令」、オ「注文」である。

(3) see the last of ~ は「～の見納めになる」という意味。the last は「最後の姿」という意味の名詞で、the last we'll see of him は、the last (of him) を (that [which]) we'll see という関係詞節で修飾した形で、目的格の関係代名詞が省略されている。したがって、This was the last we'll see of him for six weeks. は「これが、これから6週間で私たちが彼を見るであろう最後だった。」→「これから6週間、私たちは彼には会えなくなるだろう。」となる。

なお、ここで、主節の動詞が過去形の was であり、関係詞節が we'll see となっているのは、次の理由による。まず、下線部(3)の This は直前の文の My son was bearing luggage. を指しているが、これは第4段落、第5段落最終文 (Now he and my wife ... (French every day) .), 第10～最終段落第1～2文 (We signed in. ... right now.) からわかるように、筆者とその妻が息子をイマージョン合宿〔集中訓練合宿〕に送っていった時の息子の姿である。次に、問題の指示文から明らかのように、本文は筆者のブログの記事であり、(9)で詳しく説明するが、筆者は、ブログを書いている当日に息子を合宿に送っていったのである。したがって、筆者がブログを書いている時点を基準にすると、息子を合宿に送っていったのは過去のことだが、息子に会えない6週間は未来のことになるので、This was the last we'll see of him for six weeks. という表現になる。以上の点を考えれば、「今後6週間で、私たちが息子に会

えるのはこれが最後だった。」などと訳してもよい。

- (4) 空所(4)を含む文では、まず、It struck me as weird (私は変だなと思った)と述べられている。It は、直前の文中の he asked if he could be tutored in French (彼は自分もフランス語を教えてもらえるかと尋ねた)を指しており、それについて、筆者は「変だなと思った」と述べているのである。これに対し、I went (4) itは逆接の接続詞 but でつながれており、また、直後の文以降で筆者の息子が French every day というフランス語のイメージ合宿〔集中訓練合宿〕に行くまでの経緯が書かれていることから I went (4) itを、「私は彼がフランス語を習うことを受け入れた」という趣旨の英文にすると文意が通る。go with ~ は「～に賛成する」という意味なので、空所(4)には with を入れればよい。オが正解。
- (5) 下線部を含む第6段落では、ℓ.30 ~ 31に I am trying to display ~, without the violence. (私は故郷での子供の頃のしつけ、つまり、不断で終わりのない難題の意義を、暴力は抜きで披露しようとしている。)とあるように、筆者が自分の受けてきたしつけを振り返りつつ、自分の子供の教育方針について述べている。come up にはさまざまな意味があるが、この「しつけ」という文脈を考慮すると、ここでは「成長〔生育〕する」の意味と捉えるのがよいだろう。下線部を含む文の the belt and boot は「暴力を伴うしつけ」ととらえることができるため下線部は「親から厳しいしつけを受けてきた私たちの多くは、それがベルトで打たれたりブーツで蹴られたりして与えられたものであったとしても、自分たちが学んだ教訓を重んじる。」のように捉えることができる。よって、エが正解である。
- (6) 選択肢の意味は以下の通り。
- ア 彼を罰した
 - イ 彼の苦しみを感じた
 - ウ 子供であることを嫌だと思った
 - エ 見ていた
 - オ 気が進まなかった
 - カ わくわくした

空所を含む文は、「私は父さんに、父親であることに関して、私が1つ (6a) ことは、悪者になることがどれほど私を傷つけるか、私がどれほど彼を好きのようにさせてやりたいと思っているか、(6c) たびに私がどれほど (6b) かということであると話した。」という意味である。

- (6a) 空所を含む文の直前の文で、筆者は I was sitting with my dad telling him how I had to crack down on my own son for some misbehavior (私は父さんと一緒に座って、息子の悪い行いに対して、私がどのように断固たる処置をとらなければならないかを話していた)と述べている。ここで話題になっているのは、息子の悪い行いに対する、筆者の父親としての罰し方である。さらに、空所を含む英文に続く箇所では、筆者が息子と同じ12歳の頃に、厳格な父親から罰を受けたが、父親は無理に厳格さを装っていたということがわかって驚いたといった趣旨のことが述べられている。以上から、the one thing I (6a) for about

fatherhood was how much it hurt me to be the bad guy で言及されている fatherhood の内実とは、自分の子供が悪いことをした時に罰を与えることができる厳格さであるとわかる。そして筆者は、その厳格さについて、自分が悪者になる、つまり、子供に対して厳格な罰を与えることで、自分が非常に傷つくと述べている。要するに、fatherhood に関して、筆者は、よい感情を抱いていないのである。したがって、空所の直後の for とのつながりも考慮すると、(6a) にはオの wasn't prepared を入れて、「私は父さんに、父親であることに関して 1 つ私の気が進まないことは、悪者になることがどれほど私を傷つけるかということであると話した」とすれば、自然な流れになる。正解はオである。

(6b), (6c) 上で見たように、(6a) には wasn't prepared が入るが、その場合の文構造は以下の通りである。

the one thing {(which [that]) I wasn't prepared for about fatherhood}
S

was how much it hurt me <to be the bad guy>
V C

これに続くのが how much I wanted to let him loose, how much I (6b) whenever I (6c) なので、how much I wanted to let him loose と how much I (6b) whenever I (6c) は、いずれも how much it hurt me to be the bad guy と同様に補語であることがわかる。また、主語が the one thing であり、動詞が was であることから、この 3 つの節はいずれもほぼ同じ内容、つまり、父親であることに関して、筆者の覚悟ができていないことの具体的な内容であるとわかる。

空所を含む英文に続く文を見ると、I felt it because I remembered when I was my son's age, and how much I had hated being twelve. (私がそう感じたのは、自分が息子の年齢だった時のことと、12歳であることがどんなに嫌だったかを思い出したからである。) と述べられている。自分の子供時代の体験が、筆者が「気が進まない」と感じた理由であり、前述の通り、筆者は子供時代に、厳格な父親から罰を受けていたのであるから、(6b) にイ、(6c) にアを入れて、how much I felt his pain whenever I disciplined him (私が彼に罰を与えるときはどんな時であっても、どれほど、彼の痛みを感じたか) とすれば自然な文意になる。

(7) 選択肢の意味は以下の通り。

ア 筆者は息子の無礼さに驚いている。

イ 筆者は息子の思いやりに感動している。

ウ 筆者は息子が親の役割を果たしていることに心を打たれている。

エ 筆者は息子に先を越されたことに驚いている。

オ 筆者は息子がいかに急速に大人になりつつあるかを知って感銘を受けている。

下線部(7)は、その直前に筆者の息子が言った発言、"When I e-mail you," he said, "be sure to e-mail back so that I know you're OK." (「僕がメールを送ったら、」と彼は言った。「父さんと母さんが大丈夫だと僕にわかるように、必ず返信してね。)) の so that I know you're OK の箇所を、筆者が頭の中で反芻^{はんすう}している場面である。筆者は

暴力を用いないで、どのようにして子供のしつけをすればよいのか、という問いを第6段落で立て、それに対してℓ.34～36で My only answer is to put them in strange and different places, where no one cares that someone somewhere once told them they were smart. (私の唯一の答えは、彼らを見知らぬ、別の場所に置くことである。というのは、そこでは、かつて、どこかの誰かが、彼らに頭がいいねと言ってくれたことなど、誰も気にかけないからである。)と答えを出している。

この「唯一の答え」に従って、筆者は今、息子をイメージ合宿〔集中訓練合宿〕に送り出そうとしているのである。しかし、筆者は、第7段落で、But I am afraid for my beautiful brown boy. (しかし、私は、褐色の肌をした美しい自分の子供のことが心配なのだ。)とも述べている。つまり、下線部(7)の直前で筆者の息子が言った言葉は、本来なら筆者が言うはずだった言葉なのである。したがって、それを息子の方から先に言ったことに対する親の心境としては、子供の成長について、いろいろと感慨深いものがありこそすれ、無礼であるとは思わないであろう。アが正解である。

- (8) 最終段落では、筆者は息子と別れたことに思いを馳せ、人は次から次へと元いた場所から離れていくものであると述べる。そして、このことに関し、ℓ.61で筆者は、… at every step you feel a warm gravity, a large love, pulling you back home (…どの段階でも、人は温かい引力、大きな愛が自分を家に引き戻しているのを感じる)と続ける。この思いがあるからこそ、筆者はこれに続けて you feel crazy for leaving (人は、離れていくのはおろかなことだと感じる)という思いを綴るのである。この次の文では、And you feel that it is ridiculous to do this to yourself. (さらに、こんなことを自分自身に対してするのはばかげていると感じる)と述べる。ここでは、前文の crazy が、ほぼ同意の ridiculous と言い換えられ、leaving を this で受けた上で、do this to yourself (自分自身に対してこれを行う)、つまり、「離れることを自分自身に対して行う」と述べているのである。では、人はなぜ、自分の家への愛着を持ちながら crazy であり、ridiculous である、「離れる」という行為を行うのか。これについて、筆者はℓ.34～35で、My only answer is to put them in strange and different places と述べており、(7)でも見たように、「離れる」ことは、人、特に子供を鍛える唯一の方法だと考えているのである。つまり、「離れる」ことは子供を鍛えるための義務であり、課題なのである。そこで、下線部(8)を含む文であるが、そこでは、And you wonder who would do this to a child. (ましてや、誰がこんなことを子供に対してするのだろうかと思う。)と述べられている。これは、do this の対象を「自分自身」から「子供」へと移しているだけであり、この2つの do this は同じ意味であるとわかる。つまり、筆者は、人は自分の家への愛着を持ちながら、成長するための課題として愛着のある場所から離れるのであるが、それは yourself、つまり、親にとっても、a child にとってもばかげたことであると主張しているのである。以上より、解答としては、「愛着のある場所や環境から離れるという課題を与えること。」などとすればよい。

- (9) 選択肢の意味は以下の通り。

ア 筆者がセーヌ川沿いを走った。

イ 筆者の妻が泣き出した。

ウ 筆者が座って、父親と話をした。

エ 筆者の息子が2週間のフランス語のコースを取った。

オ 筆者が息子に、人生の苦しみは避けられないと言った。

カ 筆者と妻と息子が郊外へ行く電車に乗った。

キ 筆者と妻が語学のイマージョン合宿〔集中訓練合宿〕で、息子のルームメートに会った。

本問を解くにあたっては、英文中の時期を現す表現に着目しつつ、各選択肢に含まれる筆者、妻、息子いずれかの行動が本文中のどこで述べられているのかを見つけ出すことがポイント。

本文の内容は、(筆者の祖国である)アメリカでの出来事と、夏の休暇で訪れているフランスでの出来事に大別され、時系列的には前者の方がより以前の出来事である。

まず、アメリカでの出来事であるが、ℓ.39に Three weeks ago, back in America, I was sitting with my dad telling him … (3週間前、アメリカにいた時、私は父さんと一緒に座って、…を彼に話していた。)とあるので、ウは3週間前のことであるとわかる。次に、ℓ.25を見ると、In May, before coming to France, he did a two-week class … (5月、フランスにやって来る前に、彼は2週間の授業を受けた。…)とある。また、ℓ.1では、I went out this early July morning for a quick run along the Seine. (7月の今朝早く、私はセーヌ川沿いをちょっと走りに出かけた。)と述べられている。この2つの文から、筆者がフランスに滞在しているのは7月で、息子が「2週間の授業を受けた」のはフランスにやって来る前の5月だとわかる。つまり、それは2か月前のことになる。したがって、エ→ウの順番で出来事が起こっているとわかる。

次に、ℓ.14の I came home. (私は帰宅した。)より、セーヌ川沿いの走りから帰宅したことが分かる。これ以降には、筆者が帰宅してから出かけるまでの様子が描かれており、ℓ.18に、We walked out and headed for a train to the suburbs. (私たちは歩いて外へ出て、郊外へ行く電車に向かった。)と述べられ、ℓ.20に、It was on the train that I realized I'd gone mad. (自分が正気でなくなっていた気づいたのは電車の中だった。)とある。さらにℓ.27～29に Now he and my wife and I had just come to Paris for the summer, and I was sending him off to an immersion sleep-away camp … (今、彼と妻と私は、夏を過ごすためにちょうどパリに来たところで、私は彼をイマージョン合宿〔集中訓練合宿〕、…に送り出しているところだった。)と述べられているので、彼らが電車に乗ったのは息子を合宿に送るためであるとわかり、アはカより以前のことであると判断できる。次に合宿の話が出てくるのはℓ.53以降であり、同じ行に We saw his room and met his roommate. (私たちは彼の部屋を見て、ルームメートに会った。)とあるので、キはアやカより後のことだとわかる。さらに、ℓ.57を見ると、When we left my wife began to cry. (そこを出た時、妻が泣き出した。)とある。この英文中の left は「合宿の場所を後にした」という意味なので、イはキより後のことだとわかる。

最後にオであるが、ℓ.48を見ると、I told my son this story yesterday. (昨日、私は息子に次のような話をした。)とあり、ℓ.51に I told him that pain in this life is inevitable … (私は息子に、人生の苦しみは避けられないこと、…を言った。)と述べられているので、オは筆者がブログを書いた日の前日のことであるとわかる。ℓ.1に this early July morning (7月の今朝早く)と述べられており、この英文は、筆者と妻が息子を合宿へと送っていったという流れにつながっていくので、彼らが息子を合宿へと送っていったのは、筆者がブログを書いている当日であることが分かる。したがって、オは、筆者と妻が息子を合宿へと送っていった日の前日のことになる。

以上より、選択肢で述べられている出来事が起こった順番は、エ→ウ→オ→ア→カ→キ→イとなり、2番目はウ、6番目はキとなる。

全訳

7月の今朝早く、私はセーヌ川沿いをちょっと走りに出かけた。楽しかった。外にはほとんど人がいなかったので走りやすかった。パリは散歩をする人向きの街であって、走る人向きではない。

女性たちは、ヘルメットをかぶらず、白のロングドレスを着て、自転車をこいで通りを行く。あるいは、彼女たちは、ピンクの切りっぱなしの短パンとそれに合ったローラースケートをはいて勢いよく通り過ぎていく。男たちはオレンジ色のズボンと白いリネンのシャツを着ている。彼らは、ちょっとおしゃべりをして、その後、曲がり角へと消えていく。次に彼らを見かける時は、サン＝ジェルマン大通りに沿ってポルシェをゆっくりと運転して、人生を大いに楽しんでいるのだ。この都市のこの小さな地区では、誰もが「私は頑張ることさえしていなかった」という言い回しの少し異なった姿を提供してくれているように思える。

カフェではカップルが街を見ながら隣り合わせで座っている。彼らは、あたかも『ヴォーグ』誌のファッション写真の中にいるか、流行のマネキン人形で構成されたディスプレイのように何列もずらっと並んでいる。全員がたばこを吸っている。彼らは、恐ろしい死、熱狂的なパーティーなど、順番も特に決まっていないが、自分に何が待ち受けているかを知っているのである。

私は帰宅し、シャワーを浴び、服を着た。歩いて通りを渡り、パンとミルクを買った。妻はコーヒーをいれた。私たちは朝食を食べた。それから私はものすごい疲労感に襲われて、昼まで眠った。目が覚めた時、息子は(すでに)服を着ていた。妻は、華麗なるギャッツビーのTシャツ、サングラス、イヤリング、それにジーンズを身に着けているところだった。彼女の髪は後ろに結ばれ、大きくて見事なアフロに膨らんでいた。私たちは歩いて外へ出て、郊外へ行く電車に向かった。息子は荷物を持っていた。(3)これから6週間、私たちは彼には会えなくなる。

自分が正気でなくなっていたと気づいたのは電車の中だった。ボストンにいた時、私は1冊のワークブックといくつかの古い語学テープでフランス語を学び始めた。その後、私はフランス語学校の授業に移った。次に、私は個人教師を雇った。私たちはよく近所のカフェで会った。ときどき、息子が立ち寄った。私は彼がいつまでもいたがるのに気づいた。ある日、彼は自分もフランス語を教えてもらえるかと尋ねた。私は変だなと思ったが、賛成した。5月、フランスにやって来る前に、彼は2週間の授業を受けた。1日8時間であった。彼は授